



Title	教師が学び合う学校組織文化における「型」の研究 : 日本と米国の前期中等教育の比較
Author(s)	新谷, 龍太郎
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51866
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (新谷龍太郎)	
論文題名	教師が学び合う学校組織文化における「型」の研究 －日本と米国の前期中等教育の比較－
論文内容の要旨	
<p>本論文では、今後の学校組織文化研究において教師の「型」概念を用いることが有用であるということを主張する。まずなぜ学校組織文化に着目する必要があるのか、その課題は何かを先行研究から探る。教育政策は学校現場での教育実践への影響をもとに評価しなければならないという流れから、個々の学校の組織文化や教師の学び合いが着目された。しかし、今後の課題として教師個人の学習と組織としての学習をどのように結びつけるのかという課題が提起されたことを先行研究から明らかにする。</p> <p>次に、この課題克服に向けた概念として、学校組織文化研究における「型」概念の定義と有用性の説明を試みる。そのモチーフはブルデュー(P. Bourdieu)のハビトゥスにある。筆者は、学校を教員間の葛藤のアリーナと見ている。学校組織を歩いていると、近い考えや経験を持つ教員達が磁石のように引き付き合ったり、他の教員達と距離を置く様子が見られる。その様子は、ブルデューの名著『ディスタンクシオン』で描かれた、社会空間において近いハビトゥスを持つ人たちが距離を縮めていく図に似ている。本稿では、このブルデューのハビトゥスを、教師の「わざ」や個人と組織の学習プロセスという観点から論じるに当たり、日本の伝統芸能や武道における「型」の学習論から光を当てて事例解釈の枠組みを設定した。まず、ハビトゥスと伝統芸能や武道における「型」は同じ考えであることを先行研究から定位し、「形」と「型」の区別に着目する後者の議論をもとに視点を設定することで、どのようにハビトゥスを学習していくのか、そこにどのような葛藤が生じるのかというプロセスを明らかにする。</p> <p>次に、日米の事例から「型」の共有と教師の学び合いの深化には関係があることを説明していく。日本の公立中学校における「学びの共同体」の考察では、「総合的な学習の時間」に象徴される学習指導要領の改訂に応じて、身体技法としての「型」の変容が見られること、その基底には同和教育実践の水脈がある様子を描く。こうした「型」の浸透過程においてミドルリーダーの「型」の変容と他の教員の「型」との葛藤が見られることを踏まえ、学校組織文化の変容過程において「型」がどのように影響するのかを考察する。</p> <p>米国のミドルスクールにおける「専門職の学習共同体」の考察では、共通コア州スタンダーズの導入に応じて、生徒同士の話し合いを重視した「高い思考力」を狙いとする単元開発や授業展開への変容が見られること、その試行錯誤の過程において教科・学年チームが成熟するほど「型」が共有されていることを確認する。ただし、日本の「学びの共同体」での知見がそのまま米国の事例において適用可能であったわけではない。共通していたことは、インフォーマルな同僚関係や、メンター教員と若手教員の関係において、日本と同様に身体技法の「型」を介した学習があるということである。米国の場合は、むしろ知識創造組織において用いられる「クリエイティブ・ルーティン」としての「型」と考える方が適しているということを補記する。</p> <p>本稿での考察を通じて、(1) 政策社会学的研究の観点からは、教育政策が教育実践に及ぼす影響は、その学校の同僚関係や、着目する教員の「型」の履歴を踏まえて考察する必要があることを確認した。(2) 教師教育・教員文化研究の観点からは、日本の教師の学び合いの場は、授業での身体技法を洗練させ、子どもを見る目を養う道場として機能しており、米国では単元開発や教具開発など知識創造の研究室として機能していたことを指摘した。(3) 学校社会学・学校経営研究の観点からは、日本の事例から「型に習熟し、その理念を解釈するメンバーが育つことで、リーダーの描く学校組織文化が継承される」といった7つの知見を、米国の事例から「専門職の学習共同体」はチームの成熟度により3つの段階があることを示した。これら知見を踏まえて、学校組織文化の形成・継承・変容プロセスを「学校組織文化を象徴する型を介した実践の再生産」(守のフェーズ、継承、時計回り)、「学校組織文化の価値や黙示的前提、個人の型の見直し」(破のフェーズ、変容、反時計回り)、「どのような型を支配的(学校組織文化の正統的価値)とするかのマイクロポリティクスに勝利して生まれた新しい型」(離のフェーズ、形成、弁証法的止揚)からなる、時計周りと反時計回りの二重の螺旋によるモデルで示した。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (新 谷 龍 太 郎)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教授 志水 宏吉
	副 査	教授 木村 涼子
	副 査	准教授 高田 一宏
	副 査	准教授 園山 大祐

論文審査の結果の要旨

本論文は、「学習する組織としての学校」という観点から、個々の学校の組織文化がどのように合意・生成・修正されるのかという問題に教育社会学的観点から切り込んだものである。具体的には、個人学習と組織学習をつなぐ概念としてのP.ブルデュの「ハビトゥス」概念をモチーフとし、日本における伝統芸能や武道について言われる「型」の学習論を加え、フィールドワークにもとづく質的データに考察を加えた。

論文は5章から構成されている。序章で、本論文の問題意識を政策社会学的研究・教師文化研究・学校経営学的研究の3つの流れに位置づけたうえで、1章において、フランスで生まれた「ハビトゥス」概念と日本発の「型」概念を接合するための理論的検討が丁寧になされている。本論文の中核をなすのが、日本の中学校を扱った2章とアメリカのミドルスクールを扱った3章である。それぞれ長期にわたる参与観察調査で得られた多様な質的データをもとに、日米両国の前期中等教育機関における学校組織文化の生成・変容のプロセスが、それぞれ「学びの共同体」論（2章）、「専門職の学習共同体」論（3章）を軸にダイナミックに描かれている。結びにあたる4章では、2・3章で展開された議論をもとに日米の学校組織文化の比較が行われ、全体の知見とインプリケーションが整理されている。

新自由主義とも称される現代の教育改革の世界的潮流のなかで、各国の学校文化は変化を余儀なくされつつあるが、その具体的な組織文化の生成・変化のプロセスを長期にわたるフィールドワークによってつぶさに明らかにしている本論文は、きわめて貴重な意味をもつものである。さらに本論文は、学校組織文化の変容と個々の教師の成長のプロセスを結びつけて理解するために、「ハビトゥス」と「型」概念の理論的結合を図るというきわめてチャレンジングな試みを行っており、そのことが豊富な教育学的知見をもたらしていると判断される。本論文は教育社会学をベースにはいるが、政策社会学・教育学・学校経営学といった関連分野を結びつける学際的意義をもつものでもあり、当研究科のディプロマポリシーにも適した内容を有していると高く評価しうる。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。